

江戸幕府の初期貿易政策と貨幣

— お金とお金の材料の輸出 —

銀と朱印船貿易 —17世紀初頭—

16世紀末～17世紀初め、日本船やヨーロッパ船が東南アジア各地に進出し、グローバルな貿易・市場ネットワークが成立していきました。この時期、中国の銀需要などを背景に、日本の銀が大量に海外へ輸出されました。



朱印船貿易と後藤庄三郎

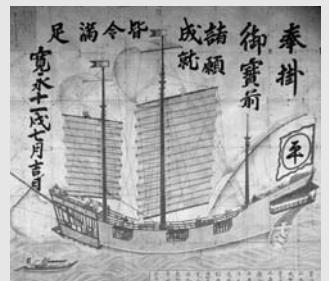
後藤庄三郎は、幕府外交を仕切っていた筆頭年寄・本多正純とともに、大名や貿易商から朱印状発給申請の取次を行っていた。

本来の家職である金貨の製造のほかに、家康の外交、貿易などを補佐し、江戸幕府の年寄クラスに準ずる有力な存在として家康政権を支えた。

『南蛮人来朝図屏風』(国立歴史民俗博物館所蔵)

初期の江戸幕府は、自らの管理下で貿易に積極的に乗り出し、朱印船貿易を行った。

従来からのポルトガル船に加え、スペイン・イギリス・オランダ・中国船などによる貿易も促進した。



『清水寺奉船繪馬下絵』(長崎歴史文化博物館所蔵)

銀・銭貨の輸出と幕府の外交政策 —オランダ貿易—

寛永年間（1624～1644年）の貿易統制強化とキリスト教禁教により、江戸幕府の外交政策は完成しました（いわゆる「鎖国」）。それまで主に朱印船・オランダ船やポルトガル船などにより東南アジアや中国へ流れていた銀は、オランダ船や中国船により輸出されるようになりました。また江戸初期には国内模鋳銭も大量に輸出されていましたが、幕府は寛永通宝の発行を計画する中で、輸出を禁止しました。

銭貨の輸出とその禁止

17世紀初頭	日本でつくられた大量の銭貨の輸出 東南アジアへ
オランダ商館の帳簿にみられる銭貨	
sakamotta (坂本<地名>) erack (永楽通宝) mito (水戸<地名>)	オランダ人は京都や大阪などの商人から、銭貨を銅地金などと共に仕入れていた。
1636(寛永13)年～	寛永通宝鑄造
1637(寛永14)年	銅の輸出禁止
1646(正保3)年	銅の輸出再開

貿易統制強化とキリスト教禁教政策

1609年 オランダ商館平戸に置かれる



平戸のオランダ商館
モンタヌス『日本遣使紀行』(長崎歴史文化博物館所蔵)

1612～13年 禁教令

1635年 日本人の海外渡航・帰国の全面禁止

ある朱印船貿易家が
1635年に抱えていた輸出用銭貨はなんと
約4000万枚！= 約100トン！？

1639年 ポルトガル船追放

1641年 オランダ商館を長崎の出島に移す

幕府の政治・外交上の転換点

中国とオランダ船による来航地は幕府直轄都市である長崎一港に限定された。



長崎出島のオランダ商館
『寛文長崎図屏風』(長崎歴史文化博物館所蔵)

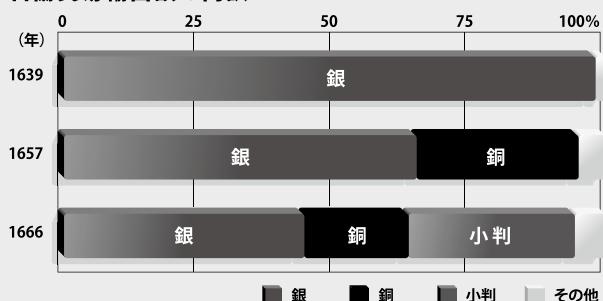
銀の輸出とその禁止

オランダ船による貿易では、主に日本の銀が輸出され、アジアの生糸などが輸入された。

1635年～1641年 大量に銀が輸出される

幕府は国内の銀貨不足を懸念し、銀輸出抑制策をとり、銅や小判の輸出が緩められた。

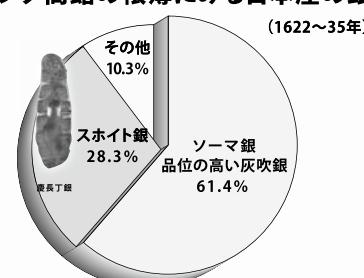
日蘭貿易輸出額の内訳



1668(寛文8)年 銀の輸出禁止(对中国船・オランダ船)

1671(寛文11)年 中国船には丁銀の輸出を再許可

オランダ商館の帳簿にみる日本産の銀



輸出額は、当初、品位の高い灰吹銀（ソーマ銀）の割合が高かったが、幕府の貿易統制により1635年以降丁銀（スホイト銀）のみが輸出された。

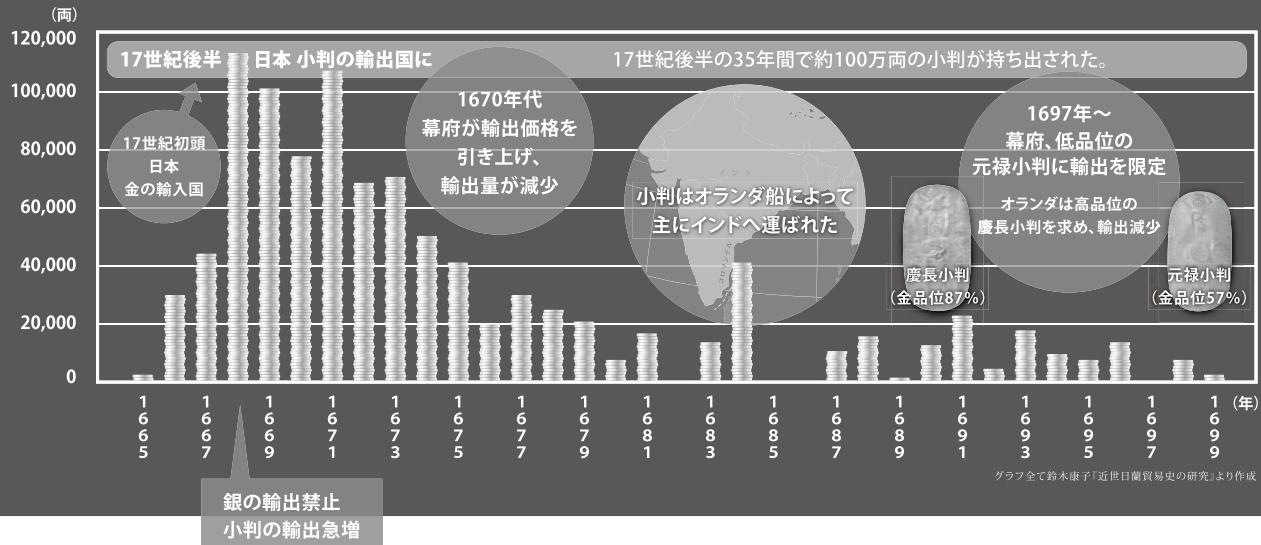
小判・銅の輸出と幕府の対応 —17世紀後半以降—

江戸幕府はお金の材料の輸出を制限するようになります。しかし当時の日本には、それに代わる有力な商品が無かったことから、その輸出は止まりませんでした。

オランダ貿易における小判(金貨)の輸出(17世紀後半)

1668年の江戸幕府による銀の輸出禁止令により、オランダ貿易での輸出は、小判と銅へと変化した。

日蘭貿易における小判輸出額推移



幕府の長崎貿易政策と銅の輸出再開

1637年に禁止された銅の輸出は、1646年に再開された。1668年銀の輸出が禁止されると、銅はオランダ貿易でもっとも重要な輸出品となっていました。

1646(正保3)年 銅 幕府統制下で輸出再開

1668年 銀の輸出禁止
1670年代 金の輸出価格引き上げ

1673(延宝元)年 輸出量、銅が最大に

1685(貞享2)年 中国・オランダとの年間貿易額を制限

金銀の流出を抑える一方で
銅や海産物を中心とした交易

1715(正徳5)年 年間貿易額・貿易船数を制限(正德新例)

新井白石の時代(18世紀初頭)になると貨幣材料(金・銀・銅)の流出を防ぐため、その最大の要因である生糸や砂糖などの輸入依存からの脱却を目指し、輸入品の国産化などの政策が進められた。



(住友史料館所蔵)

棹銅

純度が高い棒状の精銅。
インドや東南アジア向けの輸出品として好まれた。



『唐蘭館絵巻』19世紀(長崎歴史文化博物館所蔵)

長崎における銅の輸出風景

【オランダ船で輸出された日本の貨幣】

江戸初期、朱印船やポルトガル船・オランダ船などにより、日本から大量の銀や銭貨が輸出され、生糸や絹織物が輸入されました。いわゆる「鎖国」完成後も、幕府の統制のもと、オランダ船などにより日本の貨幣が輸出されました。

●銀の輸出

江戸初期の日本からの銀輸出は、総輸出額の約8割を占めた。いわゆる「鎖国」政策が完成をみる時期までは、朱印船貿易による流出がもっとも多かったと考えられる。

江戸初期、日本から輸出された銀は形状や品質が一定ではなかった。幕府は、輸出用の銀を丁銀（品位80%）に限定するため、長崎に銀座を設置し、良質な灰吹銀の輸出を取り締まった。

幕府は、日本独自の貨幣体系を確立するなかで、国内、対外取引に使われる銀貨を慶長丁銀に限定し、西日本の大名を貿易から遠ざけることで支配体制を固めていった。また一方で、朱印状の発給による朱印船貿易により大名・商人の貿易を管理統制した。

寛永年間（1624～1644年）の貿易統制強化とキリスト教禁止により、江戸幕府の外交政策は完成了（いわゆる「鎖国」）。それまで主に朱印船やポルトガル船などにより東南アジアや中国へ流れている銀は、オランダ船や中国船により輸出されるようになった。

銀輸出推計額 1604～1639年(kg)

朱印船	843,000
ポルトガル船	650,700
中国船	343,860
オランダ船	228,996
計	2,066,556

永積洋子『朱印船』より

◆オランダ東インド会社の商館の史料に見られる銀の種類

・「スホイト」銀＝慶長丁銀

オランダ語で船を意味する「schuit」に由来する。当初は高品位の灰吹銀「ソーマ銀」の輸出量が多かったが、幕府は1635年にその輸出を禁止し、スホイト銀のみが輸出されるようになった。「スホイト」銀と「ソーマ」銀の比価は81：100であったという。

500匁を渋紙に包んだ「銀座包み」の「スホイト銀」が箱に詰められ、一箱10貫入りにして送られた。そして輸出先で高品位に吹き直された。



「スホイト」銀
＝慶長丁銀

・「ソーマ」銀・「ベルフ」銀（オランダ商館の帳簿より）

いずれも純度の高い銀であったが、その形状等ははつきりしない。オランダ商館の商業帳簿から、1620～1630年代前半に最も多く輸出されたのは「ソーマ(soma, somma)」銀であったことが分かっている（「ソーマ」の意味については、形状説（中国の「ゾマ船」の形状に由来）と地名説（石見の「左間銀山」に由来）があるが未詳である）。

・レアル銀貨

1610年代の平戸では、スペインがアメリカ大陸で製造したレアル銀貨が頻繁に使用されていたことが、イギリス商館長の日記からわかる。また、レアル銀貨をスホイト銀（丁銀）に両替している。

16世紀後半以降、レアル銀貨はヨーロッパ・アジアで広く使われていた。オランダやイギリスは貿易資金として日本へレアル銀貨を送り、取引に用いた。しかし、オランダによる日本貿易が順調になってきた1626年、日本から大量のレアル銀貨が持ち出され、以後、オランダの史料にレアル銀貨に関する記載は見られなくなる。

各種の日本銀の両替相場について次のような記録がある。

「ソーマ銀はレアル貨の5%増し、ベルフ銀は3%増し、丁銀はレアル貨と同価というものが当地（バンタン）の相場で、したがって丁銀はソーマ銀にたいして4～5%、ベルフ銀には3～4%の損失となる」（初代オランダ商館長スペックスによる）

◆オランダ船で輸出された銀

オランダ東インド会社は、1609年から1667年まで日本から銀を輸出した。特に1635年～1641年（寛永12～18年）にかけて、平戸・長崎からタイオワンを経由し中国へ輸出するルートで、大量の銀を輸出し、莫大な利益を得た。

その後、明末清初の混乱の中で中国貿易が不振となり、1640年代から日本銀はベンガル、コロマニデルなどのインド地域、またトンキンなどの東南アジア地域に運ばれ、生糸はトンキンやベンガルから輸入された。

●銅錢の輸出

江戸初期、国内で製造された銭貨が、朱印船やオランダ船によって東南アジア方面に大量に輸出された。日本からは銭貨だけでなく銅地金も輸出され、ほとんどはアジアで使われたとされるが、1620年代にはアムステルダムの銅市場にも日本銅が出回った。

幕府は寛永通宝の発行開始の翌1637(寛永14)年、銅の輸出を禁止した。

◆寛永通宝発行前に輸出された銭貨

江戸初期の国内での銭貨生産の実態については資料が乏しいが、貿易史料からある程度伺い知ることができる。

銅錢は朱印船貿易でも重要輸出品であった。朱印船貿易家として知られる平野藤次郎が、1635年に日本人の海外渡航禁止によって持ち出せなくなった銭をオランダ商館に売却したが、その数は約4000万枚にのぼった。

インドシナ半島のトンキンでは、朱印船やオランダ船が運んだ銅錢や、ポルトガル人がマカオで模造した中国錢などが流通していた。オランダ船が1633年から1637年までに平戸から輸出した銅錢の量は、約1億300万枚弱とされる。

オランダ船による銭輸出の事例

輸出時期	銭の名前	枚数	購入先	積載船
1634年2月	sackamotta (坂本)	4,815,000	平戸	タイオワン経由 バタヴィア向け
	sackamotta (坂本)	4,909,000	堺	
	erack (永楽)	930,000		
1635年11月	sackamotta (坂本)	2,250,000	京都	タイオワン向け
1635年12月	sacamotta (坂本)	39,375,000	京都	タイオワン向け
	erack(jerack) (永楽)	360,000		
	saccamotte (坂本)	5,385,000	京都	タイオワン経由 バタヴィア向け
1636年12月	nume	5,250,000		
	-	2,865,000	京都	
	mito (水戸)	2,505,000	京都	タイオワン向け
1637年1月	tammarij	510,000		

安国良一「貨幣の地域性と近世的統合」表2を加工

原史料: 平戸オランダ商館「仕訳帳」

銅の輸出禁止

1637年に銅の輸出が禁止されたのは、前年からの寛永通宝発行による原材料確保のためと考えられる。オランダ側の銅の輸出要求に対し、平戸藩主が次のように答えたという記録がある。

「これ（銅の輸出）は銭貨の鋳造と、この国の銅錢の需要が満たされた後、始めて行うことが出来る。それ以前はできない。」（1639年7月25日、『平戸オランダ商館の日記』4より）

◆寛永通宝発行後に輸出された銭貨 長崎貿易銭

長崎において輸出用に鋳造された銭貨。中国・宋錢の錢文が採用されたが、中国錢とは書体は異なる。

銅の輸出再開と寛永通宝

寛永通宝の製造が軌道にのり、銅も順調に増産されたことなどから、幕府は1646(正保3)年、オランダによる銅の輸出を再許可した。銭貨も輸出されたが「寛永通宝」の輸出は禁止された。

実際には、中国や東南アジアに寛永通宝が輸出されていたことが、発掘調査から明らかとなっている。



長崎貿易銭

1659(万治2)年～1685(貞享2)年

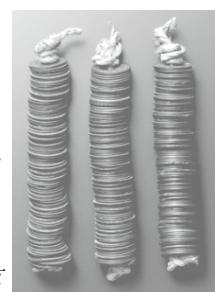


オランダ東インド会社の旅行者にも便利だった銭さし

オランダ東インド会社の医師として1690年に来日したドイツ人ケンペルは、銭さしについて

「銭さしにさした銭…(中略)
…計って売り手に渡さねばならない銀貨よりも、旅行中は支払いに一層便利である。…」

と日記に残している。
(ケンペル『江戸参府旅行日記』)



錢さし

中世以来、まとまつた
銭は持ち運びに便利なよう
に紐に通した「さし
(縋)」として授受され
た。

●小判の輸出

1660年代のオランダ船に対する小判の輸出許可と銀の輸出禁止により、17世紀後半、日本は銀の輸出国から小判と銅の輸出国となった。

オランダ船は、慶長小判の輸出で30%を超える利益をあげた。慶長小判は、インドのコロマンデル沿岸に多く送られ、現地のパゴダ金貨やファナム金貨につくり替えられた。

また、バタヴィアなどオランダ東インド会社の貿易拠点では小判がそのまま貨幣として使われたこともあった。オランダ人によってライオンのマークが加刻された慶長小判も残されている。

しかし、度々の小判の改鋳により品位や重さが低下するなかで、幕府は良質な慶長小判と同価格で取引するよう命じたことなどから、小判の輸出高は減少した。



慶長小判
品位 87% 約 18g
1601(慶長 6)年発行



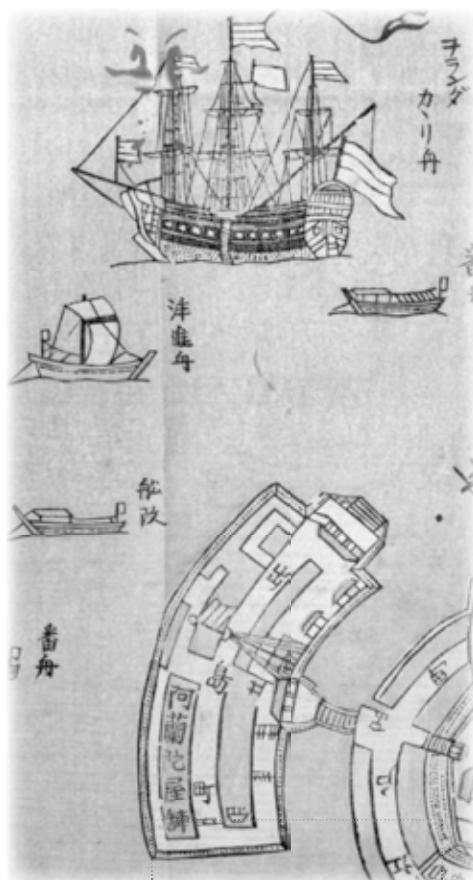
元禄小判
品位 57% 約 18g
1695(元禄 8)年発行



宝永小判
品位 84% 約 9g
1710(宝永 7)年発行



ファナム金貨
実寸 直径 5~7mm
18世紀



輸出された小判の変遷

幕府は1695年、品位の低い元禄小判を製造した。1697(元禄10)年、幕府は小判の輸出抑制のため、元禄小判を慶長小判と同価格で輸出するようオランダに命じ、オランダ側は対応に苦慮した。

次に発行された宝永小判は、品位は慶長小判並みとなったが、重さは半分であった。幕府は宝永小判も慶長・元禄小判と同価格での輸出を命じた。

小判の輸出高は改鋳と輸出価格引き上げなどにより減少した。しかし、銅の産出減少による輸出銅の不足などにより、18世紀初頭、オランダ貿易における小判の輸出は、総輸出高の4割前後を占めた。

長崎の地図に描かれたオランダ船と出島
「長崎図全」1808(文化5)年



長崎の地図に描かれた
オランダ船と出島
「肥前長崎図」
1802(享和2)年

